
Secret on The Borders

yoshina

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Secret on The Borders

【Nコード】

N9173A

【作者名】

yoshina

【あらすじ】

とある日の探偵事務所での会話。コナンの知らないところであの2人が・・・

コナンが新一だと知って間もない頃だったか。

平次は依頼された事件のついでに東京に羽をのばして毛利探偵事務所に

遊びに行ったことがある。

しかしあいにくお目当ての「工藤」は学校のオトモダチと遊びに行ってるとかで不在だった。

気立ての良い蘭は「せっかくだし夕飯くらい食べていってよ」と誘う。

すぐ帰るからいいと平次は遠慮したのだが、彼女の笑顔に押されてご好意に甘えることになった。

2

早速夕飯の買い物に蘭が出かけたので、事務所にいるのは平次とその主である毛利小五郎のみ。

彼はなにやら机の上で難しい顔をして新聞を見つめている。

競馬やな。

あのスポーツ新聞と手に握っている赤ペンを見れば一発でわかることだった。

最初に適当に挨拶を交わしたつきり彼はずっと博打とにらめっこをしている。

大穴を当てる以上のマイナスが常にある、とは小さな居候の弁。

特に小五郎と話すこともなかったので自分もソファに無造作に置かれてある

雑誌に手を伸ばそうとした。

「……………おい」

「なんや？」

新聞に視線を向けたまま小五郎が声をかけてきた。

手に取るうとした新聞はそのままにする。

「お前、あの探偵ボウズと連絡取ることあるのか？」

「探偵ボウズって工藤のことか？」

「ああ。よくお前あいつと話してるような口ぶりじゃねえか。

メールとかしてるんだろ」

まさかコナンの正体を疑っているのではないかと一瞬思ったがそうでもないらしい。

だがあまり突っこまれて聞かれても困るので慎重に返事をする。

「そらまあ、同じ高校生で探偵やし？事件のこととかで連絡することはあるけどアイツがどこで何してるとかは知らんで。そういうことならアンタの娘のほう知ってるんとちゃうんか」

あくまで工藤との連絡は事件がらみのみ。
事情を知る者以外にはいつもそう話していた。

「蘭には元気になっているとしか話してないそうだが」
「そんなら元気なんとちゃうか？元気やなかったら連絡もできんやろうし」

なにやら話しの意図が読みにくい。
この男は一体何が聞きたいのだ？といぶかしむ。

「本当に元気なんだな？」

「……どういふことや。何やオッサンの話聞いてたらアイツが無事やないのに無理して姉ちゃんに連絡してるように聞こえるんやけど？」

「本当に」という言葉で話の矛先がわかってきたが、自分は知らぬ存ぜぬを通す。

蘭以上に自分が彼のことを知っていると感じかれると後々まずいのだ。

それにしてもこの男、まさか工藤新一を

「あのボウズが消えてから一週間くらい経ってからツテを頼って探したんだよ。

流石に一週間もないとなると事件に巻き込まれた可能性が高いからな。

それにあいつのことだ、無謀に自分から首突つこんだと考えてもおかしくないだろ」

おっちゃんそれイイ線いつてんで。

じゃなくて、やはり工藤新一を彼は探したことがあるのだ。

どれだけへボでも一応は探偵。

人探しくらいはお手のもんだらう。

「んで？工藤の足取りはわかったんか？」

そんなこと、聞かなくてもわかるのだが。
「知らぬ存ぜぬ」を通す限り白を切りまくる。

「全くわからなかったからこうしてお前に聞いてるんだよ。
どう考えたっておかしいだろ。その場から人が急に消えるなんてよ。
トロピカルランドから出た記録もなかったしな」

いつのまにか小五郎は顔をこちらに向けていた。

その顔は真剣だ。

そこまで調べてたんかい、と平次はこっそり冷や汗をかく。
さてどう答えるべきか。

「あの男が自分の近辺状況を言わないのは、それだけ危険がある
っていうことだ。

だが言わない以上こっちからそれに干渉する義理はねえ。
ただ本当に無事かどうか知りたいだけだ。俺の娘が心配し通しなん
だよ」

娘を安心させるために工藤のことを知りたいというのは本当だろう。

しかし小五郎自身も工藤を心配していることはありありとわかった。瞬間的に頭の中で様々なことを考える。

自分が持つ選択肢は三つ。

一つ目は親友のためにこのまま白を切る。

二つ目は親友の彼女のためになんだかんだ言いつつ口は堅そうなこの男に正直に話す。

そして三つ目は……

工藤「悪いけどちょっと言うなー、と心の中で手を合わせた。

「……………正直言って、工藤がどんな事件追ってるかは俺も知らん。

でも、アイツは無事や。ぴんぴんしてる。そんでいつか事件解決して必ず

アンタの娘のところに戻ってくる。……それだけははっきりと言えるわ」

それは俺が保障する、と断言した。

彼の抱えてる事件がどれだけ途方もないことかわかっているつもりだが

それでも彼女のところに戻ってくる。

それだけは間違いないと自分も信じている。

そしてこの言葉にどう思ったのか、2人の間に少しだけ沈黙が流れた。

そして、

「……別に蘭のところには戻ってこなくてもいいんだよ。つたくややこしいことしゃがってあのボウズ……」

色々聞いて悪かったな、と言いつつ”探偵ボウズ”に悪態をつきながら

小五郎は再び新聞に目を通し始めた。

内心ほっとした平次はソファに座りなおしポケットの中に入れていた携帯を取り出す。

そしてあて先を「工藤」にした。

慣れた手つきで短く文章を打ち、送信ボタンを押して再びポケットにしまう。

ちらりと机にいる男に目を遣るが、今度は真剣に競馬を見ているようだ。

ホンマ、どこのオヤジも何考えてるかわからんなあ

自分の父親に勝るとは思わないが、劣ってもいないかもしれない
と思った。

『好きな女の家やゆつてもあんまボロ出さんときや』

そんなメールがコナンに届くのはすぐだった。

(後書き)

多分平次はコナンの知らないところで、こんな風に「工藤」について苦労してるんじゃないかと思えます(笑)

裏タイトルは「目指せカツコイイオヤジ」です。(!?)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9173a/>

Secret on The Borders

2010年11月4日02時00分発行